

石川 和之

学校名：横浜市立宮谷小学校 担当教科：6年担任

1. 今回のウガンダ研修における目的やねらい

今まで、私がやってきた国際理解の授業では、どうしても「見る」「聞く」「触れる」といった活動が中心であった。民族衣装を着たり、一緒にダンスを踊ったり、食べ物を食べたりと、その国の人と実際に出会って行う授業でも、その1時間が終わると、そこから子どもたちの「どうしてだろう」という疑問がなかなか出てこず、どうしても「考えて調べてまた考える」という授業に発展できなかった。そこで今回の研修では、ぜひウガンダ共和国を中心に子どもたちと問題解決的な学習をしたいという強い思いがあった。具体的には、まずは①子どもが興味を持つ資料、そして②「どうしてだろう」という疑問を持つ話題、③子どもたちから出た疑問について子ども自身で調べられる資料、そして④私自身がどこまで子どもの疑問に臨機応変に支援できる考えをもっているか、最後に⑤子どもにぜひ出会わせたい方、この5点について深めていきたいというのが私の目的・ねらいであった。

2. 目的やねらいの達成度

目的の①については、ウガンダの子どもたちの生活の様子や、日本の国際協力の様子について、写真やビデオを中心に子どもたちに示すことができる資料はある程度集めることができた。また、実際にウガンダの方が作ったものや歌や踊りを披露してくれた時に使っていた楽器などの具体的な資料も用意することができた。難しかった点は、②の子どもたちが「どうしてだろう」と疑問を持つ話題、つまりクラスの子どもたちに考えさせたい学習問題についてである。私自身も9日間のウガンダ滞在期間中、多くの疑問を持った。ある程度解決できた部分もあればまだに分からない部分も多々ある。しかし、私自身が子どもと一緒に考えてみたい要素は多く持ち帰ることができた。最後に、⑤の子どもたちにぜひ出会わせたい方だが、今回の研修にて、ウガンダで頑張っている20名以上の日本人、そしてすごいなあと思うウガンダ人のカウンターパートの方も大勢出会うことができた。この出会いこそがこの研修の最大の成果だと思う。これからもぜひ継続してコンタクトをとらせていただきたい。

3. ウガンダから学んだこと

キーワードは、「主役」である。国際協力という言葉から私のクラスの子どもたちがまず考えられることは、①橋や校舎を作ったりノートや実験器具などを寄付するというハード面、そして②米作りなどの農業を教えたり実験器具の使い方を教えたりするソフト面、以上の2点に分けられると思う。今回の研修では、ハードの整備もさることながら、それをどう有効活用していくかというソフト面のサポートが一番大切だと強く考えさせられた。そして「開発」における主役は、必ず現地の「ウガンダ人」であるということも。

ルコメラ小学校で交流授業をして、ウガンダの子どもたちのあふれるパワーを感じた。子どもたちにとって、今の彼らの暮らしは自分自身に誇りを持った大切な生活であるはずだ。私たち日本人は、彼らがよくなるようにしている点について、サポートすることが大切なのである。青年海外協力隊員の方で言えば、2年間サポートし続けて、その後のその村の発展に「布石」をうつことが大切であると実感した。

また、日本から見たアフリカというどうしても貧しい生活の中で飢えがひどいのだろうと予想しがちである。しかし、私が実際に見たウガンダにおいて飢えはなかった。そして過ごしやすい気候の中、ゆったりとした生活をしているように見えた。自然を有効活用して豊かな生活を送っている様子はすばらしいと思う。「開発」そして「豊かな生活」について、日本にいるときの一方的な自分の基準でははかりきれないものがあると強く考えさせられた。